

中央図書館所蔵 近藤文庫について : 幕末明治期漢学者旧蔵書群

山根, 泰志
九州大学附属図書館コンテンツ整備課電子化係

<https://hdl.handle.net/2324/13292>

出版情報 : 貴重文物講習会. 17, 2009-02-13. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

中央図書館所蔵 近藤文庫について：幕末明治期漢学者旧蔵書群

九州大学附属図書館コンテンツ整備課電子化係

山根 泰志

【報告内容】

- 1、中央図書館保存書庫混排漢学者旧蔵書群について
- 2、旧蔵者・受入経緯調査方法
- 3、近藤文庫調査経緯
- 4、西田幹治郎旧蔵書調査経緯
- 5、樋口和堂旧蔵書、逍遙文庫について
- 6、幕末明治漢学者旧蔵書群の意義
- 7、今後の整理方針について

【配布資料】

(ページ)

九州帝国大学附属図書館漢学者旧蔵書受入年表	1
分類別部数比較表	2
近藤文庫について	3
楠本家・近藤家系図	6
近藤信卿傳	7
近藤畏斎略年譜	9
西田幹治郎旧蔵書について	11
樋口和堂旧蔵書について	16
逍遙文庫について	17
漢学塾関連年表	19

【展示資料】

『図書原簿(和漢書)』

近藤新右衛門写『東照宮御遺訓』(近藤文庫)

小川晋齋自筆『晋齋先生答問』(近藤文庫)

大原友仁写『訂翁三部書』(近藤文庫)

中村惕齋旧蔵『延平問答』(近藤文庫・貴重)

横地玄蕃助書入『荀子』(西田)

横地玄蕃助書入『陸宣公全集釋義』(西田)

西田幹治郎写『方鑒秘訣集成』(西田)

西田幹治郎とその門下生写『小學蒙養集』(西田)

西田鉄・千浦友七郎写『端山文稿』(西田)

島崎正樹・藤村旧蔵『山陽文稿』(西田)

伏見版『吾妻鑑』(樋口・貴重)

写本『保元物語』(樋口・貴重)

宗逍遙書入『左傳輯釋』(逍遙文庫)

亀井昭陽旧蔵『孟子外書』(逍遙文庫)

原古処旧蔵『孟子』(逍遙文庫)

九州帝国大学附属図書館漢学者旧蔵書受入年表

年月日	年号	受入資料	附属図書館長
1931.8.31	昭和 6	樋口和堂旧蔵書	豊田實
1933.8.15	昭和 8	楠本碩水旧蔵書 (碩水文庫)	〃
1933.9.9		楠本碩水旧蔵書 (碩水文庫)	〃
1934.3.30	昭和 9	『洪範全書』等 4 部 (碩水文庫関係・楠本正継教授寄贈)	西山重和
1934.5.30		『禮記集説』等 4 部 (碩水文庫関係・楠本正継教授寄贈)	〃
1934.11.15		近藤畏斎旧蔵書 (近藤文庫)	〃
1934.12.27		『碩水先生遺書』等 11 部 (碩水文庫・岡次郎氏寄贈)	〃
1935.7.25	昭和 10	『碩水先生日記』『碩水先生語略』(碩水文庫・岡次郎氏寄贈)	〃
1936.2.20	昭和 11	『近思録欄外書』(碩水文庫関係)	〃
1936.12.5		近藤畏斎旧蔵書 (近藤文庫)	春日政治
1937.12.6	昭和 12	西田幹治郎旧蔵書	〃
1938.3.25	昭和 13	近藤畏斎旧蔵書 (近藤文庫)	〃
1941.7.1	昭和 16	宗逍遥旧蔵書 (逍遥文庫)	干潟龍祥
1943.12.1	昭和 18	『碩水先生遺書』等版木 (岡次郎氏寄託・10 年後譲渡)	竹岡勝也
1945.4.15	昭和 20	『敬齋先生文稿』等 10 部 (碩水文庫関係・楠本正継教授寄託)	楠本正継
1953.3.28	昭和 28	上記寄託図書中『敬齋先生文稿』等 5 部寄贈 (残り 5 部は天理大学に寄贈)	古野清人

分類別部数比較表

九州大学附属図書館和漢書分類表 (旧分類)	近藤	西田	樋口	逍遙
01 書史 書目	-	-	1	1
02 事彙 類書	2	5	2	10
03 叢書 全集	-	1	2	1
04 雜纂 講演論文集	4	3	1	4
12 中国哲学	241	119	53	114
14 日本哲学	16	21	1	7
17 宗教学 宗教哲学	-	2	-	2
18 仏教	2	3	-	1
19 教育学 教授法	3	3	1	4
20 法律 法学	10	11	5	16
21 国際公法	-	2	-	-
22 刑法	1	-	-	-
26 政治哲学	2	12	2	1
30 経済学	-	-	1	1
31 経済政策	3	1	2	-
36 社会問題	1	-	-	1
40 商業 産業	-	-	-	1
41 商業学	-	1	2	1
51 国語	1	13	3	8
52 中国語	3	8	3	17
54 国文学	3	11	22	20
55 謡曲 狂言	2	-	-	1
56 中国文学	66	94	73	122
60 史学	1	3	1	6
61 国史	11	4	20	27
62 古文書	3	2	5	3
63 中国史	11	10	10	35
64 西洋史	-	1	-	-
65 伝記	5	16	6	18
66 人文地理学	1	2	15	6
67 地図学	-	1	-	-
68 九州郷土 誌料	-	7	-	5
71 音楽	-	2	-	1
72 絵画	-	-	-	2
74 書道	1	-	2	9
77 諸技	-	-	1	-
80 自然科学	-	5	3	2
81 物理学	-	-	5	1
83 地質学 古生物学	-	-	1	-
84 一般生物学	-	2	3	1
86 工学(ほぼ兵学)	2	22	38	9
90 医学	1	23	1	-
91 解剖学	-	2	1	-
92 法医学	-	1	-	-
93 内科学	-	-	1	-
95 眼科学	-	-	1	-
合計	396	413	288	458

近藤文庫について

1、受入・排架について

昭和9年11月15日 357部 2016冊 546.9円

昭和11年12月5日 13部 186冊 156円

昭和13年3月25日 26部 42冊 61.43円

計：396部 2244冊 764.33円

納入業者：積文館

排架場所：現在、中央図書館保存書庫に混排（一部は貴重書庫）

カードに「近藤文庫」の印（昭和11年追加分にはカード裏に「近藤文庫」、昭和13年追加分にはカード裏に「樋口」とあり）

碩水文庫の旧蔵者楠本碩水の同庚の親友で、楠本家と親戚でもある平戸藩士近藤畏斎の旧蔵書。碩水文庫同様宋儒性理の書、崎門（山崎闇齋学派）諸儒の著述を中心とし、小川晋斎自筆『晋斎先生答問』、池田草庵著『尚書蔡傳贅説補』（『池田草庵先生著作集』に収録）等、貴重な資料を多く含む。

2、受入の背景

- ・前年の碩水文庫の受入・・・碩水文庫同様、恐らくは楠本正継教授の斡旋
- ・畏斎の甥岡次郎と娘婿益田祐之はしばしば崎門関係文献を九大に寄贈

→九州帝国大学を「九州の小西山」に

※針尾を訪れた西村天囚（大阪朝日新聞主筆）は端山・碩水・近藤氏三家の蔵書を称え、「針尾は其れ九州の小西山（湖南省にある小西山の麓に、書千巻を秘蔵した穴が存在するという伝承から、蔵書の多いことのとえ）なるかな」と評した。

3、関係者略伝

・近藤畏斎(1832-1891)

平戸藩士近藤新右衛門正堅（号竹斎）の子として針尾島（現長崎県佐世保市針尾中町）に生まれる。名は久敬、字は信卿、通称は三郎（後勇三郎・惺蔵）、号は畏斎。楠本端山、月田蒙斎に学ぶ。

・近藤思斎(1845-1902)

畏斎の弟。名は久徴、字は誠夫、号は思斎・誠堂、通称は久米吉（後収蔵）。楠本端山、吉村秋陽、池田草庵に学ぶ。崎針尾村初代村長。

・近藤竹斎(1786-1872)

平戸藩士。畏斎・思斎の父。名は巖有・正堅、通称は新右衛門、号は竹斎。楠本端山・碩水の伯父鴨川嘉一兵衛(名道応)の養女喜良を娶って鴨川の家を継ぐ。楠本・近藤兄弟に句読を教え、僻村の針尾から大学者を輩出する端緒を開いた。

・楠本端山(1828-1883)

平戸藩儒。平戸藩士楠本忠次衛門（号養斎）の子として針尾島に生まれる。名は後覚、字は伯暁、号は端山・悔堂・静復、通称は覚蔵。妻は畏斎の妹燕。藩校維新館で佐々鶴巢、浅野鶉庵、葉山高行に学び、江戸に出て佐藤一斎、吉村秋陽、大橋訥庵に学ぶ。のち、月田蒙斎の影響で崎門の朱子学を奉ず。桜谿書院、江西書院、鳳鳴書院を建て、門人を育成する。その著は『端山先生遺書』（全8巻）に収められている。旧蔵書は楠本文庫として長崎県立長崎図書館・長崎歴史文化博物館に所蔵。

・楠本碩水(1832-1916)

端山の弟。名は孚嘉、字は吉甫、号は碩水・天逸、通称は謙三郎。佐藤一斎、月田蒙斎に学び、崎門の朱子学を承ける。兄の端山・畏斎と共に鳳鳴書院を建て、門人を育成する。編著に『朱王合編』(全4巻付1巻)、『碩水先生遺書』(全12巻)等がある。旧蔵書は碩水文庫として九州大学附属図書館に所蔵。

・岡彪邨(1864-1949)

平戸藩士岡直温(号竹斎)と畏斎の妹竹の子として生まれる。名は直養、字は子直、号は彪邨、通称は次郎。父を早くに亡くし、畏斎に育てられる。端山、碩水、東沢瀉、川田甕江に学ぶ。上海の日清貿易研究所、東京の海軍軍令部新聞翻訳課等に勤務、退職後は早稲田高等学院教授となる。弟の幸七郎(号西門)とともに、碩水の遺著をはじめとする崎門文献を数多く出版する。戦災後は針尾の近藤家の空小屋を借りて隠棲。

・益田古峯(1866-1944)

秋月の下級士族の子。母雪の弟益田静方は秋月党の盟主の一人。名は祐之、号は古峯。妻は畏斎の娘静。山口県令関口隆吉に育てられ、大橋陶庵の思誠塾、栗本義喬の螟蛉塾、碩水の鳳鳴書院に学ぶ。「福陵新報」記者、福岡県東筑尋常中学校の雇教師を経て、中学修猷館の漢文担当教諭となる。旧蔵書は益田文庫として九州大学附属図書館に所蔵。

4、蔵書印

①近藤家

「畏斎蔵書」：近藤畏斎

②端山・碩水関係

「悔堂藏弁」：楠本端山

「碩水蔵書」：楠本碩水

「千浦蔵書」「介庵」：千浦守義(1850-1902)・・・平戸藩士。端山の女婿。

「秋月春風樓磯氏印」：磯淳(1827-1876)・・・秋月藩儒。秋月党の謀主となり自刃。京都時代に碩水と親交があった。

「修堂蔵書」：片山修堂(1837-1912)・・・朝川壽太郎。端山門下。滋賀師範学校長。

「述堂圖書」「片山藏」：片山述堂(1811-1841)・・・朝川善庵次男。片山修堂の父。

「善菴」「善菴圖書」「善庵三十年精力所聚」「樂我小室珍藏」：朝川善庵(1781-1849)・・・折衷学派の山本北山に学び、松浦侯、藤堂侯などから賓師の礼を受けた。

③その他

「敬甫」(『延平問答』)：中村惕斎(1629-1702)・・・京都の朱子学者。同印は閑谷学校蔵『扶桑略記』にも認められる。

「賢木園記」(『易經本義』)：内藤広前(1791-1866)・・・国学者、幕臣。裏松光世の『大内裏図考証』を考訂。水野忠央の請により『丹鶴叢書』の編纂に参加。

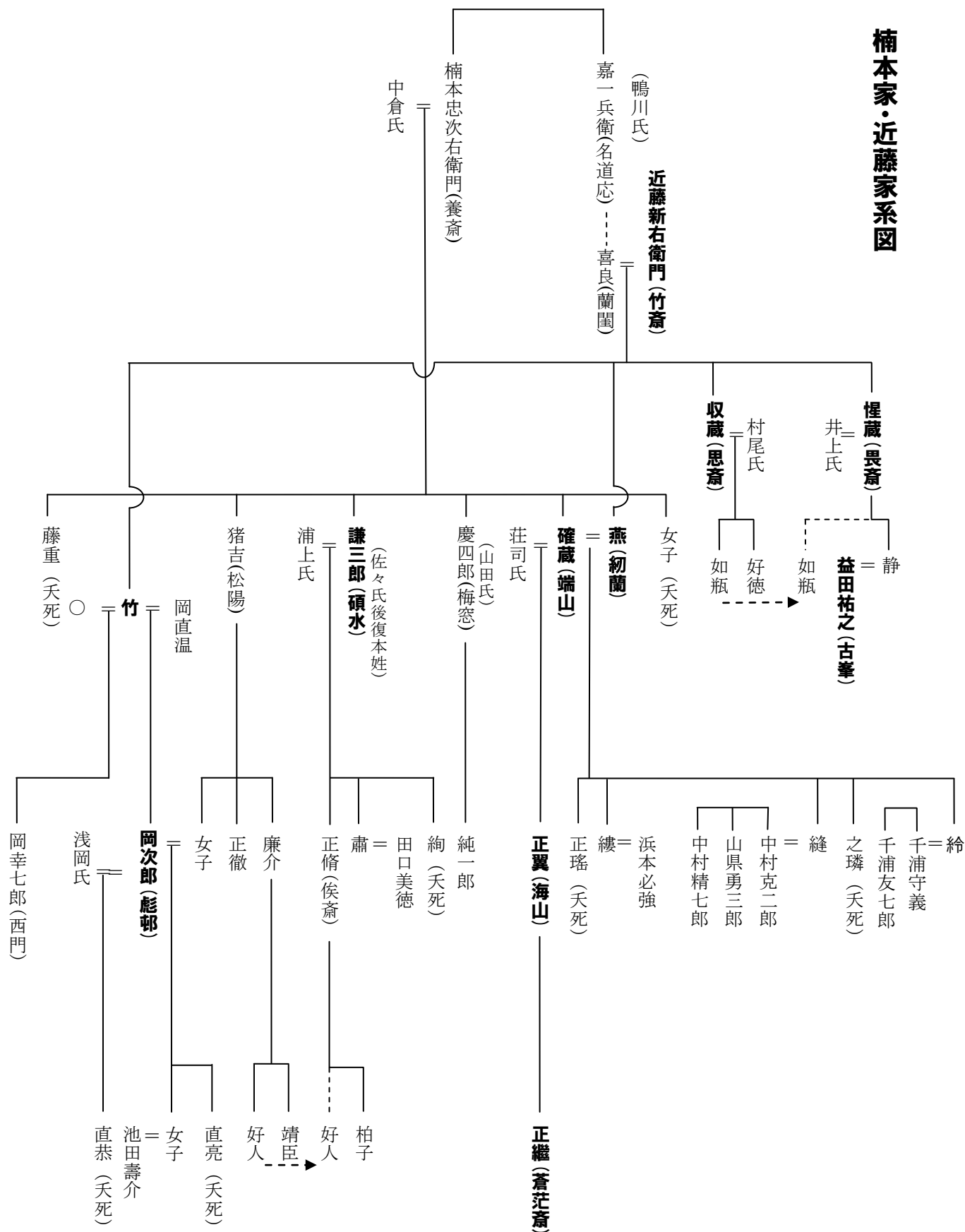
「兼葭堂印」(『正字通』)：木村兼葭堂(1738-1802)・・・文人画家、本草学者、蔵書家、コレクター。町人でありながら広く文雅風流の士と親交を持った。

「復齋珍藏」(『濂洛風雅』)：林復齋(1801-1859)・・・林述斎六男、鳥居耀蔵弟、十一代大学頭。ペリ一艦隊との交渉にあたった。

【参考文献】

- 『松浦詮伯年譜』松浦伯爵家編修所、1927
- 『松浦詮伯傳』松浦伯爵家編修所、1930
- 「針尾島の学者楠本碩水先生」岡直養『伝記』4(1)、1937
- 「彪村翁茶話」蒲生春里『平戸之光』41、1940
- 『楠本端山：生涯と思想』岡田武彦、1959
- 「岡彪邨先生」平泉澄『続々山河あり』立花書房、1961
- 『楠本碩水伝』藤村禅、芸文堂、1978
- 『池田草庵先生日記：山窓功課』青谿書院保存会、1979
- 『池田草庵先生著作集』青谿書院保存会、1981
- 『楠本端山・碩水全集』岡田武彦等編、葦書房、1980
- 『近世藩校に於ける学統学派の研究』笠井助治、吉川弘文館、1982
- 「中村惕斎」『中村惕斎・室鳩巢』柴田篤、明德出版社、1983
- 「小笠原敬斎略伝」福田殖『中国哲学論集』9、1983
- 「端山・碩水先生の墓地について」久田美好、『針州』12、1988
- 『九州の儒者たち：儒学の系譜を訪ねて』西村天囚著、菰口治校注、海鳥社、1991
- 「楠本家墓地探訪記」平川定美『郷土研究』27、2000
- 『佐世保市史』通史編上巻、佐世保市、2002
- 『針尾郷土史』針尾地区町内公民館連合会、2005
- 「碩水文庫余滴：楠本正継教授と九州大学附属図書館」柴田篤『中国哲学論集』33、2007
- 「益田古峯小伝：九州大学「益田文庫」旧蔵者」柴田篤『中国哲学論集』34、2008

楠本家・近藤家系図



※「楠本家系図」(『楠本端山・碩水全集』岡田武彦等編、葦書房、1980)、
「楠本家系譜」(『佐世保市史』通史編上巻、佐世保市、2002)を元に作成

近藤信卿傳(『碩水先生遺著』卷七)

同庚者有焉、而同庚而同里者鮮矣。同庚同里者有焉、而同庚同里而同學者益鮮矣。況於同庚同里同學、而志同道合、始終如一日者乎。近藤君信卿、與余同庚、而居亦相鄰。自襁褓時、朝夕往來、嬉笑娛戲、未嘗不相同也。甫十歲同就鄉師、授句讀。及稍長余出居平戸、君亦來平戸。既而余游豐後、君亦遊筑後。地不甚遠、得時相見。後余建書院於櫻谿之上、以會同志。君亦來游於櫻谿。其間雖不無聚散離合、然書問往來未嘗絕也。君家世爲平戸藩士。考諱正堅、號竹齋、班嫡子格、家祿二十石。慶應元年二月、君擢爲近侍。又轉藩學訓導。列大小姓班、增祿若干。中興之初、余官京師、君從軍於奧羽。無何余罷官、君亦免職。相繼而歸、同入舊里山中。晨夕過從如襁褓時矣。君從余伯兄端山學、後游肥後受業於月田蒙齋。故其學一奉程朱不敢少異也。又善擊劍、極其秘奧、其他武技亦無不通矣。君性溫厚確實、不與人爭、而至義之所在則必爲而後已。余伯父嚴齋府君者、君之外祖父也。府君無子、君受其產、以奉祭祀。一旦知其非義、乃與伯兄議割其田宅、使余承其後。君於喪祭、皆遵文公家禮、不用神佛俗儀。非深志於聖賢之道、則安能之哉。君名久敬、字信卿、號畏齋、稱惺藏。肥前彼杵郡針尾島人。以天保三年壬辰八月十四日生、明治二十四年辛卯十月二十九日終。享年六十。娶井上氏、無子、養從子如瓶爲嗣。余與君交不啻如兄弟、而未嘗有一言一語相忤也。蓋知君者、莫如余、而知余者亦莫如君。乃撰是傳以使世世勿忘焉。明治三十四年三月。

(書下し文)

同庚の者は焉れ有るも、同庚にして同里の者は鮮なし。同庚同里の者は焉れ有るも、同庚同里にして同学の者は益鮮なし。況や同庚同里同学にして、志同じく道同じく、始終一日の如き者をや。近藤君信卿は余と同庚にして居も亦た相鄰し。襁褓の時より朝夕往來し、嬉笑娛戲未だ嘗て相同じくせずんばあらざるなり。甫め十歳にして同に郷師^①に就きて句讀を授けらる。稍長ずるに及び、余出でて平戸に居し^②、君も亦た平戸に来る。既にして余豊後に遊び^③、君も亦た筑後^④に遊ぶ。地甚だしくは遠からずして、時に相見ゆるを得。後に余書院を櫻谿の上に建て、以て同志を会む^⑤。君も亦た来りて櫻谿に遊ぶ。其の間聚散離合無きにあらずと雖も、然れども書問の往來は未だ嘗て絶えざるなり。

君が家世平戸藩士爲り。考、諱は正堅、號は竹齋、班は嫡子格^⑥、家祿は二十石なり。慶應元年二月、君擢せられて近侍と爲る。又藩学訓導に転ぜられ、大小姓の班に列せられ、祿若干を増せらる。中興の初、余京師に官せられ^⑦、君は奥羽に従軍す。何も無く余罷官せられ、君も亦た免職せらる。相繼ぎて歸り、同に旧里の山中に入る。晨夕過從すること襁褓の時の如し。

君は余が伯兄端山に従いて学び、後に肥後に遊び、業を月田蒙齋に受く。故に其の学、一に程朱を奉じて敢えて少しも異とせざ

るなり。又撃剣を善くし、其の秘奥を極め、其の他の武技も亦た通ぜざる無し。君、性温厚確実、人と争わずして、至義の在る所は則ち必ず為して而る後に已む。余が伯父敵齋府君は君の外祖父なり^⑧。府君、子無く、君、其の産を受け、以て祭祀を奉ず。一旦其の非義^⑨なるを知るや、乃ち伯兄と議して其の田宅を割き、余をして其の後を承けしむ^⑩。君の喪祭に於けるや、皆『文公家礼』^⑪に遵い、神仏の俗儀を用いず。深く聖賢の道に志すに非ざれば、則ち安くんぞ之を能くせんや。

君、名は久敬、字は信卿、号は畏齋、惺蔵と称す。肥前彼杵郡針尾島の人なり。天保三年壬辰八月十四日を以て生まれ、明治二十四年辛卯十月二十九日に終わる。享年六十なり。井上氏を娶る。子無く、従子如瓶^⑫を養いて嗣と為す。

余、君と交わること^た畜に兄弟の如きのみならずして、未だ嘗て一言一語の相忤^⑬うことも有らざるなり。蓋し君を知る者、余に如くは莫くして、余を知る者亦た君に如くは莫し。乃ち是の伝を撰し、以て世世忘ること勿^なからしむるなり。明治三十四年^⑭三月。

① 父近藤新右衛門のこと。

② 一八七五年（弘化二）、碩水は藩校維新館教授佐々鶴巢の養子になる。

③ 一八四八年（嘉永元）、碩水は日田の広瀬淡窓の門に入る。

④ 恐らくは久留米。

⑤ 桜谿書院（一八六三・一八七〇）は、碩水が維新館の学風にあきたらず、親友桑山良知・朝川尚綱とはかつて平戸に建てた私塾で、崎門学による教育を中心にし、端山も教育に加わったが、明治三年廃藩とともに廃された。

⑥ 平戸藩士の階級は以下の通り。家老、中老、物頭、物頭並、中老嫡子格、大小姓、馬廻、役馬廻、中小姓徒土組、弓組、足軽、脇間。後一八六七年（明治元）八月、大者頭・者頭・奏者格・大小姓の四階級に改正。

⑦ 一八六八年（明治二）十二月、碩水は大学少博士心得に任ぜられるも、京都の大学校代の廃止により、翌年八月に免ぜられる。

⑧ 敵齋は碩水の父養齋の長兄嘉一兵衛。鴨川氏の養子になった。女を近藤新右衛門に嫁がせ、後嗣とした。

⑨ 養子というものは天理に背いたことであるからということで、楠本家に鴨川家の祭祀を引き継がせた。碩水も「不冒異姓是孝之第一義」として、一八六九年（明治二）佐々姓から本姓に復している。

⑩ 従来、小作米は碩水三十五俵、近藤家三百俵だったのを、碩水百五十俵、畏齋百五十俵、収蔵八十俵とした。

⑪ 儒家の礼法儀章を詳述したもの。朱熹（朱文公）撰と題するが、王懋竑『白田雜著』によれば後人の仮託。

⑫ 収蔵の子。

⑬ 一九〇一年。畏齋没後十年目、碩水七十歳。

近藤畏斎略年譜

西暦	年号	年齢	記事
1832	天保 3	1	8.14 平戸藩士近藤新右衛門正堅(号竹斎)の子として針尾島(現長崎県佐世保市針尾中町)に生まれる。名は久敬、字は信卿、通称は三郎(後勇三郎、惺藏)、号は畏斎。
1836	天保 7	5	7.5 妹燕(字小燕、号初蘭)生まれる。
1841	天保 12	10	楠本端山・碩水兄弟とともに父新右衛門から句読を習う。
1842	天保 13	11	9.21 井上氏(畏斎夫人)生まれる。
1843	天保 14	12	10.22 新右衛門の養父鴨川嘉一兵衛(名道応)卒(享年 59 歳)。
1845	弘化 2	14	2.11 弟収蔵(名久徴、号思斎)生まれる。
1848	嘉永元	17	9.14 九州遊学に出た碩水を送る。 この頃久留米に遊学か?
1849	嘉永 2	18	4.18 久留米に宿した碩水を訪れる。 11 佐賀草場珮川の門に入った碩水とともに帰郷。
1850	嘉永 3	19	2.18 妹燕、端山の元に嫁ぐ。
1851	嘉永 4	20	2.10 久留米に碩水来訪。
1852	嘉永 5	21	1.8 碩水とともに針尾を発ち、平戸に至る。
1853	嘉永 6	22	4.8 碩水と江戸から戻った端山とともに舟で矢岳浦に停泊し、翌日平戸に至る。 8.6 村尾氏(収蔵夫人)生まれる。
1854	安政元	23	8.17 碩水、松陽とともに長崎に遊び、22 日に別れる。 この年、収蔵、困学寮に入門。
1857	安政 4	26	3.5 碩水とともに針尾を発ち、平戸に至る。
1861	文久元	30	4 収蔵、広島吉村秋陽の門に遊学。 月田蒙斎の門に遊学、端山・碩水から送別詩を贈られる。
1862	文久 2	31	8.26 藩主松浦詮針尾を巡見、近藤新右衛門宅に宿す。 8.5 新右衛門、藩より真珠貝の取締を命じられる。
1863	文久 3	32	1 小倉小笠原敬斎を訪問。 7.1 桜谿書院落成。 8.13 中山忠能の護衛のため、京都に派遣される。 9.14 小笠原敬斎卒(享年 36 歳)。
1864	元治元	33	6.12 妹竹、岡直温(号竹斎)の子岡直養(次郎、字子直、号彪邨)を生む。
1865	慶應元	34	2 近侍と為る。 5.14 岡直温とともに上京を命ぜられる。 この頃、岡直温等西郷吉之助と面会し、薩藩との交りの道を開く。 冬、岡直温事故死、畏斎が直養を引取る。
1866	慶應 2	35	7.29 月田蒙斎卒(享年 60 歳)。

1867	慶應 3	36	11.15 吉村秋陽卒（享年 70 歳）。
1868	明治元	37	10.18 収蔵、池田草庵の青谿書院に入門。
1869	明治 2	38	8～12 奥羽平定に従軍。
1870	明治 3	39	10 収蔵、平戸に帰る。
1872	明治 5	41	5.27 山田梅窓とともに記録編集掛に命じられ、嘉永 6 年以来王事に関する件、羽州出征に関する件の取調に従事。
1879	明治 12	48	9.9 父新右衛門卒(享年 87 歳)。
1880	明治 13	49	2.5 碩水に外祖父嘉一兵衛の後継となることを要請。
1881	明治 14	50	2.20～26 碩水、収蔵等と船で長崎見物に出かけ、清国領事館を訪ね、博覧会を見学する。
1882	明治 15	51	3.3 碩水、収蔵等と大谷で観潮。
1883	明治 16	52	8 頃、 鳳鳴書院落成。
1884	明治 17	53	3.18 楠本端山卒(享年 56 歳)。
1887	明治 20	56	8.13 収蔵長男好徳生まれる。
1889	明治 22	58	1.11 収蔵次男直輔生まれる。
1891	明治 24	60	5 収蔵、崎針尾村初代村長となる。 この年、娘静、益田祐之(号古峯)の元に嫁ぐ。
1895	明治 28		5 病床に就く。
1900	明治 33		10.29 近藤畏斎卒(享年 60 歳)。
1901	明治 34		11.29 収蔵夫人村尾氏卒（享年 43 歳）。
1902	明治 35		10.18 近藤燕卒（享年 65 歳）。
1907	明治 40		3 碩水、「近藤信卿伝」を撰す。
1916	大正 5		2.28 近藤収蔵卒(享年 58 歳)。
1917	大正 6		5.28～30 西村天囚、碩水宅・近藤家を訪問。
1919	大正 8		2.26 畏斎夫人井上氏卒（享年 75 歳）。
			12.23 楠本碩水卒(享年 85 歳)。
			1.24 近藤直輔卒(享年 31 歳)。
			9.13 近藤好徳卒(享年 36 歳)。

西田幹治郎旧蔵書について

1、受入・排架について

検収日：昭和 12 年 12 月 6 日

数量：413 部 1886 冊

金額：407.4 円

納入者：西田梓（西田孚嘉吉の婿養子）

排架場所：現在、中央図書館保存書庫に混排（一部は貴重書庫）

瀬高の庄屋・漢学者西田幹治郎の旧蔵書を中心とし、内 111 部が師である柳川藩儒横地玄蕃助旧蔵書、内玄蕃助書入本は 58 部に及ぶ。朱子学の書を中心とするが、易学・医学・兵学の書も多数含まれる。

2、受入経緯

昭和 12 年 5 月 9 日西田孚嘉吉（幹治郎次子）卒

6 月 24 日瀬高町に春日政治館長他 3 名出張・・・『歳出推参簿』内国旅費

10 月 4 日搬入・・・下記書簡と電報（柳川古文書館蔵）

- ・西田梓宛田中鉄三（九州帝国大学附属図書館）書簡「冠省 明倫堂及歳寒堂蔵書七拾個本日正受取候」
- ・西田梓宛電報「ケウージダイガクウケイレスマシタアベ」・・・「アベ」＝阿部暢太郎
西田幹治郎門下で福岡日日新聞社阿部暢太郎の仲介で九州帝国大学附属図書館が購入。

3、関係者略伝

・西田幹治郎(1831-1908)

金栗村庄屋西田寛忠（号波鏡）の子として山門郡小川村金栗に生まれる。名は言度、字は伯軌、通称は幹治郎、号は縮堂。幼くして学問を好み、壇秋芳の鶴鳴堂に入門し、長じて横地玄蕃助の龍山書院で漢学を学ぶ。閉鎖した龍山書院を引き継ぎ、金栗の生家に龍山書院下第一義塾明倫堂（麗川義塾）開設。明治 27 年に塾内の祠堂に藩校伝習館の孔子像を祀り、春秋二回の祭奠を続けた。また、漆塗細工に巧みで、聖牌祭器等を自製し、それらは現在の伝習館高校での祭奠でも用いられている。明治 41 年 78 歳で没した。

・横地玄蕃助(1796-1875)

柳川藩中老格横地信之の子。名は威明・敬徳、号は春斎・龍山・独醒。佐藤一斎に学び、また平山行蔵、清水俊蔵に兵法を学んだ。文政 7 年柳川藩校伝習館学監、万延元年評定所奉行、明治 3 年藩校文武館教授。嘉永年間に倉永に龍山書院を開設、尽忠報国の精神を高唱し、志賀喬木、西田幹治郎、永松毅、津村宣哲、済田平一、久保田言罕等を輩出。晩年に柳河城下にて歳寒堂（回天社）開設。明治 8 年 80 歳で没した。

・西田鉄(1859-1921)

西田幹治郎の長子。初名は鉄次郎、後鉄・和協・天章・天信・阿吽鉢囉婆^{あむはらば}。平戸の楠本端山に入門し、沖縄県巡査の後、沖縄県令西村捨三に伴って上京し、内務省土木局に入省。義父東京米穀取引所理事長米倉一平の斡旋で川越鉄道の取締役になるも、詐欺取財罪により福島県白河監獄に収監。出所後、阿吽鉢囉婆教なる新興宗教を興し、同じ端山門下の実業家山県勇三郎（ブラジル移民の先駆者）・中村精七郎（山九運輸創業者）兄弟とともに事業を展開、教団を拡大するも、新聞各紙の排斥報道と山県商店の倒産に伴う勇三郎のブラジル出奔により衰退。大正 10 年、九州帝国大学附属病院にて 63 歳で没した。著に『海南餘話』等。

・西田孚嘉吉(1865-1937)

西田幹治郎の次子。初名は誠、字は子蘭。今村弥守の養子になり、今村家を相続。針尾の鳳鳴書院にて楠本碩水に学び、大江尋常小学校雇教員、警視庁巡査を経て、大江尋常小学校准訓導となる。後、復姓して家督を継ぐ。昭和 12 年 72 歳で没した。

・阿部暢太郎(1884-1966)

瀬高町の農家阿部弥七の次男に生まれる。本名長太郎、号は麗湖。少年期に西田幹治郎について漢学を学び、上京して明治法律学校に入る傍ら英数学館、正則英語学校に出入した。日露戦争後の兵役の後、福岡日日新聞社に入社。昭和7年の5・15事件で、福日紙が社説で軍部を批判した際は、編集長として社説を執筆した菊竹淳編集局長をたすけて軍部の威嚇と闘った。昭和20年西日本新聞社長に就任、のち同社相談役。昭和30年から34年まで瀬高町長。昭和41年83歳で没した。

4、蔵書印

①西田家・横地家

「西田蔵書」「務民之義」：西田幹治郎

「西田鋳印」「西田鋳乎圖書之印」「西田鐵印」「字剛天號毅齋」：西田鉄

「孚嘉吉之印」「西田孚嘉吉印」「字子蘭」：西田孚嘉吉

「不追拒樓義書之印」：明倫堂

「歳寒堂所蔵附與明倫堂敬承蘊義塾不敢出他方同門看讀者肅無致孟浪」：明倫堂・・・横地玄蕃助没後、その蔵書が明倫堂に寄贈された。なお、この蔵書印は、廣瀬文庫『太極圖説』、関西大学長澤文庫『金華子』『省心禰言』にも認められる。

「龍山巖子印」：横地玄蕃助

②柳川藩関係

「柳城書庫之印」「柳城文庫」：柳川藩立花家

「郭南」：矢島行昌(?-1835)・・・柳川藩家老。

「鶴舞堂印」：立花蘭斎(1801-1831)・・・柳川藩八代鑑壽公の子、十二代鑑寛公の生父。詩文に長じ、柳川文壇の中心。

「篁亭」：立花親英(1837-1904)・・・立花親褒の子、立花政樹（日本で最初の英文科卒業生）の父。

「檀氏東郊」「壇秋芳印」：壇秋芳(1804-1886)・・・柳川藩儒牧園茅山に師事し、吉井に私塾「鶴鳴堂」を建てて子弟教育に務めた。

③久留米藩関係

「納戸蔵本」：久留米藩有馬家

「尾關文庫」：尾關正義(1755-1798)・・・久留米藩士。国学者。本居宣長、不破守直に学ぶ。

④その他

「萩野山中文庫」(『五種遺規』)：萩野山中藩大久保家

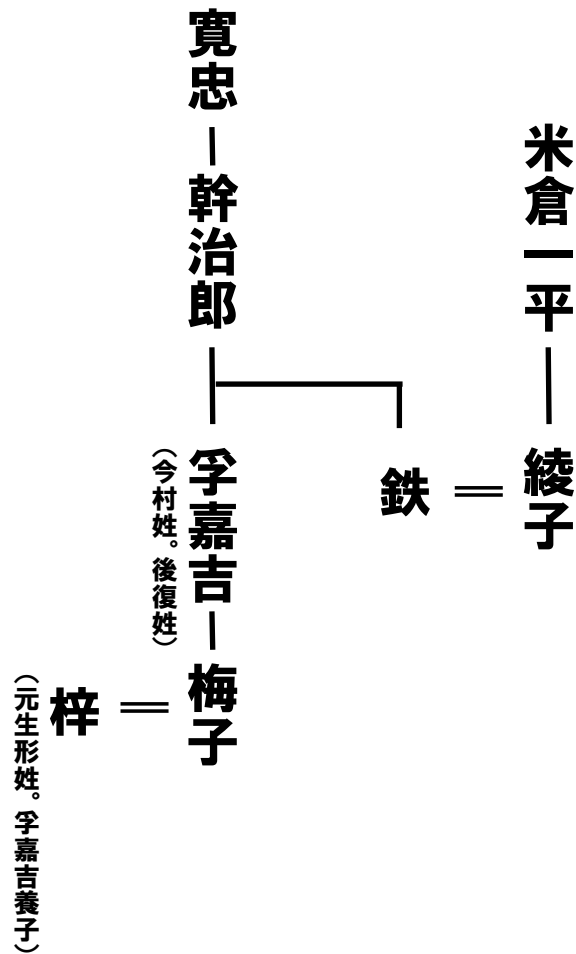
「栗本文庫」(『傷寒論輯義』)：栗本鋤雲(1822-1897)・・・幕医、外国奉行。維新後は報知新聞主筆。

「伊江御殿」(『萬國奇觀』)：伊江御殿・・・第二尚氏の分家で、代々伊江島の按司地頭をつとめた琉球王国の大名。

「信岐峴馬籠島崎氏記」(『山陽文稿』)：島崎正樹(1831-1886)・・・馬籠宿本陣、国学者。島崎藤村の父。『夜明け前』青山半蔵のモデル。

「島崎春樹」(『宋三家詩話』『山陽文稿』)：島崎藤村(1872-1943)・・・島崎正樹の四男。作家、詩人。代表作に『破戒』『夜明け前』等。

5、西田家系図



6、西田幹治郎略年譜

西暦	年号	年齢	記事
1831	天保 2	1	8.4 金栗村庄屋西田寛忠(号波鏡)の子として山門郡小川村金栗に生まれる。名は言度、字は伯軌、通称は幹治郎、号は縮堂。
1847	嘉永元	17	檀秋芳の鶴鳴堂に入門。
1853	嘉永 6	23	横地玄蕃助(名は威明・敬徳、号は春斎・龍山・独醒)の龍山書院に入門。
1859	安政 6	29	9.1 前妻江崎澄との間に長子鉄次郎(鉄・和協・天章・阿吽鉢囉婆)誕生。
1863	文久 3	33	閉鎖した龍山書院を引き継ぎ、龍山書院下第一義塾明倫堂(麗川義塾)開設。
1865	慶應元	35	12.19 後妻せととの間に次子誠(後孚嘉吉)誕生。 横地玄蕃助、柳河城下にて歳寒堂(回天社)開設。
1871	明治 4	41	11 第 49 区戸長に任ぜられる。
1872	明治 5	42	学制頒布により明倫堂閉鎖。
1873	明治 6	43	7 閉塾後も講習を申出る者が続出したため、開塾願を提出。 12.24 第 2 大区小 11・12 区戸長に任ぜられる。 この年、古賀イエを後妻に迎える。

1875	明治 8	45	6 頃 東津留・金栗・上小河村戸長に任ぜられる。 6.30 横地玄蕃助卒(享年 80 歳)。
1876	明治 9	46	5 頃 鉄次郎、平戸の楠本端山に入門。
1878	明治 11	48	2.14 誠、今村弥守の養子になり、今村家を相続。 10 大蔵省の依頼で旧柳川藩・三池藩の貢租関係の調査に従事。
1879	明治 12	49	3 頃 鉄次郎、平戸中村家に滞在。
1883	明治 16	53	父寛忠卒 (享年 93 歳)
1884	明治 17	54	1.26 阿部暢太郎(名は長太郎、号は麗湖)生まれる。 6 火災により義塾全焼。 8.4 小川村村会議員になる。 同 25 (山門郡) 町村連合会議員になる。
1885	明治 18	55	この頃、鉄次郎、清国福建に半年間滞在、地勢人情民業物産軍備街区事故等を調査し、『福州事情』を著す。
1886	明治 19	56	4 鉄次郎、沖縄県令西村捨三に伴って上京し、内務省土木局に入省。
1887	明治 20	57	この頃、誠、楠本碩水の鳳鳴書院に入門、孚嘉吉と改名。 11 鉄次郎、『海南餘話』出版。
1888	明治 21	58	8 鉄次郎、正式に鉄と改名。
1889	明治 22	59	12 鉄、東京米穀取引所理事長米倉一平の娘綾子と結婚。
1891	明治 24	61	この年、川越鉄道発足、発行人委員長米倉一平の斡旋により、鉄、取締役として入社。
1893	明治 26	63	この頃、「福岡縣舊租要略」執筆に従事。 この年、鉄、枕木購入時に不正行為があったとして詐欺取財罪で起訴される。
1894	明治 27	64	10 藩校伝習館の孔子聖像を預り、義塾内に聖堂を新設し、祭祀を行う。 12.28 孚嘉吉、大江尋常小学校雇教員依願免雇。
1895	明治 28	65	1 孚嘉吉、上京し、巡查教習所に入学。 3 孚嘉吉、警視庁巡查になるも、7 月病気のため辞職。 10.28 鉄、東京地方裁判所で詐欺取財罪により重禁固 6 ヶ月・罰金 20 円・監視 6 ヶ月の判決を受け、福島県白河監獄に収監される。
1896	明治 29	66	4 鉄、釈放されて東京に戻る。
1898	明治 31	68	2.18 鉄、237 世天台座主石室孝暢について得度、黒谷青竜寺に参籠。 5.3 鉄、天台宗教師 13 級 (権律師) に補任。
1899	明治 32	69	この頃、孚嘉吉、帰郷。
1900	明治 33	70	この頃、鉄、戸籍名を和協から阿吽鉢囉婆に改め、布教活動を本格化させる。 2.9 孚嘉吉、大江尋常小学校准訓導となる。 4 阿吽鉢囉婆、日本橋区中州 18 号の米倉家の別荘に転居。 11.3 阿吽鉢囉婆、華嚴宗の検定試験を経て権僧正に補され、同年、惣持院住職となる。
1901	明治 34	71	5 阿吽鉢囉婆教の発展により小石川区目白関口台町 55 番地に白法精舎が完成。 7.9 の『中央新聞』の阿吽鉢囉婆教の排斥報道を皮切りに、新聞各紙で阿吽鉢囉婆教の醜聞記事が掲載される。 10.23 阿吽鉢囉婆と義絶、家督を孚嘉吉に譲り、隠居する。 11 阿吽鉢囉婆教の信者であったイエと協議離婚。孚嘉吉、西田姓に復姓。

1903	明治 36	73	5 阿吽鉢囉婆の側近巽来次郎、『阿吽鉢囉婆教興隆論』発表。
1904	明治 37	74	この年、阿吽鉢囉婆、『教王章』・『教綱章』発表。
1905	明治 38	75	2.15 孚嘉吉とともに針尾の楠本碩水を往訪。 12 阿吽鉢囉婆、『断疾経』・『阿教内門修瑜伽行軌』発表。
1906	明治 39	76	9 阿吽鉢囉婆、『大教王宗』発表。
1908	明治 41	78	3 阿吽鉢囉婆、『章仏身莊嚴功德蔵品』発表。阿部暢太郎、福岡日日新聞に入社。 3.30 山県勇三郎、山県商店の倒産に伴い、ブラジルに出奔。 6.24 西田幹治郎卒(享年 78 歳)。 9 阿吽鉢囉婆、『奥吉野回峰日記』発表。 11 阿吽鉢囉婆、『念誦成仏行軌入輪壇印言法』発表。
1914	大正 3		10 阿吽鉢囉婆、後妻高宮ヤソと離別。
1918	大正 7		10 中村精七郎、磯部組を買収して山九運輸株式会社を発足。
1919	大正 8		8 阿吽鉢囉婆、白法精舎を去り、本郷区駒込上富士前町 5 に転居。
1920	大正 9		1 阿吽鉢囉婆、鹿児島に転居。 7 阿吽鉢囉婆、体調悪化により、福岡県二日市温泉の旅館海玉楼に移り、療養生活に入る。 12 阿吽鉢囉婆、大藪納と入籍し、福岡郊外の竹下村に移る。
1921	大正 10		7.27 西田阿吽鉢囉婆、九州帝国大学附属病院にて卒(享年 63 歳)。
1937	昭和 12		5.9 西田孚嘉吉卒(享年 72 歳)。

【参考文献】

- 『筑豊人物志料』伊東尾四郎、1909
『二川地方誌』内野喜代治、1936
「彪村翁茶話」蒲生春里『平戸之光』41、1940
『旧柳川藩志』渡辺村男、福岡県柳川・山門・三池教育会、1957
『高田町誌』高田町、1958
『福岡地方におけるデモクラシーの発展』阿部暢太郎述、1960
「柳河藩龍山書院考証：地方史の再検討」西田豊『有明地歴論叢』2、1965
「ある新興宗教阿吽鉢囉婆の話」荒川秀俊『日本歴史』219、1966
『瀬高町誌』瀬高教育委員会、1974
『下庄小学校創立百周年記念誌』下庄小学校創立百周年記念事業推進委員会、1980
『楠本端山・碩水全集』岡田武彦等編、葦書房、1980
『柳川史話』岡茂政、新潮社、1984
『大江小学校の歩みと郷土：創立百周年記念誌』大江小学校創立百周年記念誌編集委員会、1987
「明治期における新宗教と新聞報道：阿吽鉢囉婆教排斥報道を中心として」神英雄『龍谷史壇』113、1999
「山県勇三郎と阿吽鉢囉婆教」神英雄『歴史と佛教の論集：日野照正博士頌寿記念論文集』、2000
『新・柳川明証図会』、柳川市史編集委員会、2002
『西田家文書目録』1-3、柳川古文書館、2003-2005
「大江天満神社扁額『大宰府神社』の調査研究報告」松尾正幸『佐賀大学文化教育学部研究論文集』12-2、2008

樋口和堂旧蔵書について

1、受入・排架について

検収日：昭和6年8月31日

数量：購入分 88部 513冊

寄贈分 200部 859冊

計 288部 1372冊

金額：購入分 525円

寄贈分 456円（評価額）

計 981円

納入者：丸善

寄贈者：樋口正作（樋口和堂長男）

排架場所：現在、中央図書館保存書庫に混排（一部は貴重書庫）

寄贈分資料には「樋口正作寄贈」の印

寄贈分については、昭和6年9月11日に福岡市鳥飼から運搬（『歳出推算簿』）

八女酒井田の漢学者樋口和堂の旧蔵書。蔵書は経書に留まらず紀行文や兵書等多岐に渡り、伏見版『吾妻鏡』等国書にも見るべきものが多い。なお、第二貴重書庫にある未受入の箱入『皇清經解』（磯淳旧蔵本）は、「敬孫塾印」の蔵書印があり、樋口和堂旧蔵書の一部と推定される。

2、関係者略伝

・樋口和堂(1835-1898)

八女郡三河村酒井田の人。幼名は謙吉、後に剛太郎、精鋭と改め、真幸と称す。号は和堂、呉竹庵、玄黄洞主。妻は本荘星川の姪。漢学を高橋嘉遯、安井息軒、国学を栗原柳庵、兵学を織田武一郎に学んだ。幕末に国事に奔走した後、伏見練兵場教授、久留米藩校明善堂助教、上妻郡下妻郡立上等小学校兼変則中学校中洲校初代校長を歴任、また遜敬塾（敬孫書院）を開設して郷党の子弟を薫陶した。国民協会系の筑南協会を組織し、筑後地方一帯の選挙干渉を指導した。著作に「後征西将軍考」「五条氏家譜考証」等。

3、蔵書印

「樋口」「本家/筑後國上妻郡酒井田村樋口氏之印」：樋口家

「樋口眞幸」「樋口精鋭」「和堂」「玄黄洞主」「不動如山」：樋口和堂

「樋口達印」：樋口正作

「本荘氏藏」「本荘氏圖書章」「本荘謙印」：本荘星川・・・通称一郎。久留米藩儒。

【参考文献】

『稿本八女郡史』福岡県八女郡役所、1917

『筑後先哲遺著目録』筑後遺籍刊行会、1926

『福岡県先賢人名辞典』文照堂、1933

『増補西海忠士小伝』筑後史談会、1938

『久留米人物誌』篠原正一、菊竹金文堂、1981

『ふるさとの教学茶話』大石喜八郎、1984

『久留米市史』第3巻、久留米市、1985

逍遙文庫について

1、受入・排架について

検収日：昭和 16 年 7 月 1 日

数量：458 部 2786 冊

金額：2,244.1 円（評価額）

寄贈者：宗盛一（当時九州水力社員、九州帝国大学工学部出身）

排架場所：現在、中央図書館保存書庫に混排（一部は貴重書庫）

資料に「逍遙文庫 宗盛一氏寄贈」の印

修猷館教授宗盛年（号逍遙）の旧蔵書。宗盛年の旧蔵書は、盛年死後 1907 年に盛年が開館に深く関わった私立福岡図書館（1902-1917）に一時寄託されており、その時のラベルは現在も残っている。私立福岡図書館閉館後に宗家に返還。後嗣宗滋殖（盛年三男）が昭和 15 年 11 月 27 日に没して後、九州帝国大学附属図書館に寄贈。寄贈時には、私立福岡図書館の旧蔵書からなる廣瀬文庫が九州帝国大学附属図書館に寄託（戦後に購入）されていた。

亀井昭陽、原古処、磯淳等、福岡を代表する儒者の旧蔵書を多数含み、経史子集を網羅する。

2、関係者略伝

・宗盛年(1824-1904)

福岡藩士中村佐市第二子。出て宗氏を嗣ぐ。修猷館に学び、経史百家読まざる所なく、特に『春秋左氏傳』を愛読し、左伝癖と称せられる。修猷館助教、支藩秋月侯伴読、修猷館教授の後、藤雲館等の私立学校教師を歴任。又家塾有終舎を開く。衣食の料を縮めて書籍を購求し、蔵書数千巻の多きに至る。著に『修身初訓』。金龍寺に葬る。

・広瀬玄銀(1855-1916)

高木金寛長男として島根県大社町に生まれる。高木家の別姓広瀬家を称し、幼名鎌之助、世襲名は嘉内。福岡藩吉田家の庇護の元、出雲大社教神徳宣布の九州布教区を担当。出雲大社福岡分院の境内に私立福岡図書館を設立した。閉館後、その蔵書の多くは売却されたが、残った蔵書は廣瀬文庫として九州大学附属図書館に所蔵。

・江藤正澄(1836-1912)

国学者。旧秋月藩士。初め上野氏、幼名は栄次郎・健次郎、通称は蘇平次・弥左衛門、号は観古堂・随神屋・瓦礫主人。宮永保親に国学和歌を、坂田九郎右衛門に有職故実を学ぶ。小笠原流の指南でもあった。大宰府神社等諸神社の宮司を歴任、考古学の普及にも努めた。私立福岡図書館設立の中心人物の一人。旧蔵書は廣瀬文庫に多数含まれ、自筆稿本類は昭和 6 年 10 月 20 日に三男広三郎氏により九州帝国大学附属図書館に寄贈。

3、蔵書印

「龜井昱印」：亀井昭陽(1773-1836)・・・亀井南冥の子。福岡藩儒。著書に『左伝續考』等。

「原姓藏本」「古處」：原古処(1767-1827)・・・秋月藩儒。亀井南冥に学ぶ。

「秋月春風樓磯氏印」：磯淳・・・磯淳の印は碩水文庫・近藤文庫・樋口和堂旧蔵書にも見られるが、逍遙文庫が最も多い。

【参考文献】

『福岡県碑誌』筑前之部、大道学館、1929

『福岡県先賢人名辞典』文照堂、1933

「私立福岡図書館館史」筑紫豊『図書館学』6、1958

『福岡市紳士録』昭和37年版、1962

『秋月が生んだ明治の文化人江藤正澄の面影』筑紫豊、秋月郷土館、1969

『九州の儒者たち：儒学の系譜を訪ねて』西村天囚著、菰口治校注、海鳥社、1991

『増補版玄洋社発掘：もうひとつの自由民権』石瀧豊美、西日本新聞社、1997

『広瀬玄銀関係資料』2005

漢学塾関係年表

西暦	年号	記事
1857	安政 4	2 楠本端山、家塾困学寮(在平戸)を創設
1863	文久 3	西田幹治郎、閉鎖した龍山書院を引き継ぎ、山門郡金栗の自宅に龍山書院下第一義塾明倫堂(麗川義塾)開設 7.1 楠本碩水、桜谿書院(在平戸)創設
1868	明治元	9.16 漢学所、皇学所(在京都)創建決定、楠本碩水、漢学所講説官に任じられる
1869	明治 2	3.20 「修史の詔」により、漢文による正史編纂開始 9.2 京都大学校建替のため、漢学所・皇学所廃止 6.15 昌平学校を大学校と改称 11.22 京都大学校廃止通達 12.8 楠本碩水、大学少博士心得に任じられる 12.17 大学校を大学と改称
1870	明治 3	2 大学規則公布 夏楠本端山、閉鎖した桜谿書院を引き継ぎ、平戸に私塾を開設 7 京都大学校廃止 8.27 楠本碩水、大学少博士を免ぜられる 12.22 『新律綱領』頒布
1871	明治 4	宗逍遙、有終舎(在福岡地行西町)開設 7.18 大学を廃止して文部省を設置
1872	明治 5	8.2 学制頒布 明倫堂閉鎖
1873	明治 6	7 西田幹治郎、明倫堂閉塾後も講習を申出る者が続出したため、開塾願を提出 9.13 岩倉使節団帰国 10 征韓論政変 この頃、旧平戸藩主松浦心月公、楠本端山を中心に島津久光擁立運動
1874	明治 7	有終舎閉鎖 2.15 佐賀の乱
1875	明治 8	10.27 島津久光、左大臣を辞任
1876	明治 9	3.28 廃刀令 10.27 秋月の乱
1877	明治 10	1 黒田家の資金により荒戸山下に十一学舎開設、宗逍遙教官になる 2.15 西南戦争 4 東京大学設立、文学部に和漢文学科設置
1878	明治 11	12.26 上妻郡山内村に上妻郡下妻郡立上等小学校兼変則中学校中洲校創設、樋口和堂、初代校長になる
1879	明治 12	1 向陽社(後の玄洋社)により向陽義塾(在福岡本町)開設、宗逍遙出講す 12 大同学館創立 この年、宗逍遙、春信義塾(在福岡薬院)を開設
1880	明治 13	6.6 斯文学会発会式

1881	明治 14	9 平戸に猶興書院（松浦心月公設立の私学）完成、楠本端山出講す 1.10 向陽義塾を引き継ぎ、黒田家により藤雲館（在福岡浜の町）開館、宗逍遥教官になる
1882	明治 15	1.1 旧刑法施行 5.30 東京大学文学部附属古典講習科設置 8 頃鳳鳴書院（在佐世保市針尾島）落成 12.2 『幼学綱要』頒布
1883	明治 16	8.21 斯文覺開校
1884	明治 17	宗逍遥、有終学校（在福岡地行西町）開設 6 火災により明倫堂全焼
1885	明治 18	10.17 樋口和堂、遜敬塾（在八女郡酒井田）開設 12 森有礼が伊藤博文内閣初代文部大臣に就任
1886	明治 19	学校令頒布 条約改正論・国字改良論・言文一致運動
1888	明治 21	古典講習科廃止
1889	明治 22	この頃、遜敬塾休業
1890	明治 23	7 斯文覺廃校 10.30 教育勅語発布
1894	明治 27	10 西田幹治郎、藩校伝習館の孔子聖像を預り、義塾内に聖堂を新設し、祭祀を行う
1897	明治 30	鳳鳴書院閉鎖

漢学塾存続の背景

- ・ 旧幕の鴻儒の生存
- ・ 漢学書生・・・「今の参議は皆書生」
- ・ 漢語漢文の流行
- ・ 幕末維新の志士たちの交流→方言では通じない・・・標準語・国際言語としての漢語
- ・ 明治初年の政治論を記すには雄健さ簡勁さの持味を持つ漢文、漢文直訳体の文章が適する→詔勅・建白書・論説書簡等に漢文
- ・ 明治 3 年 12 月 22 日『新律綱領』・・・明律を継承した清律が基、荻生徂徠『明律国字解』が司法官の必読書→明治 15 年の西洋法系の旧刑法導入まで
- ・ 「可愛い書生さんに遣りたいものは通鑑綱目・史記・左伝」・・・司法官の試験は無点本の『通鑑綱目』に訓点をつけること
- ・ 洋学の学習の基礎に漢学が必要であるという共通認識

【参考文献】

『日本教育史資料』文部省総務局課、1890-1892

『日本漢学史』牧野謙次郎述、世界堂書店、1938

『福岡県教育百年史』第一巻資料編（明治 I）、福岡県教育委員会、1977

『幕末維新时期漢学塾の研究』溪水社、2003